

杉並の風日記 R06.04.21



大阪万博会場_先が見えず



愛媛、高知地震_震度 6 弱

能登半島地震から3ヵ月半経過、17日(水)の深夜、今度は豊後水道を震源とするマグニチュード6.6の地震が発生しました。愛媛県内では愛南町で震度6弱を観測したほか、宇和島市で震度5強、八幡浜市や大洲市などで震度5弱を観測しました。愛媛県の伊方原発では運転中の3号機で、発電機の出力が約2%低下したそうですが、運転に影響はない—ほんと?—とのこと。宇和島市の飲食店では、約300枚の食器が棚から落ちて床に散乱したそうです。地震の影響で松山市や宇和島市などで5人がケガをしましたが、全員軽傷ということで何よりです。また宿毛市内では、水道管の破損で一時20軒ほどが断水しましたが、現在は復旧したものの、水がにごるなどの影響が発生していて、市役所に給水車を派遣させ対応に追われています。

気象庁は今回の地震について、“南海トラフ巨大地震の想定震源域の中で発生したが、想定されるプレート境界の地震とはメカニズムが異なる”と発表。そして地震の規模が小さいことから、“南海トラフ巨大地震の発生の可能性が高まったとは考えていない”と話していました。でも何かシロウト目には南海トラフっぽく感じます。時と場所を選ばずに頻発する。以前、村上春樹がカタルーニャ国際賞の授賞式のスピーチで“我々は言うなれば、地震の巣の上で生活を営んでいるようなもの”と語っていたことがまた思い浮びました。能登半島は地震から3ヵ月たっても、まだ水道が復旧していないところがあります。輪島の朝市のあたりだって、がれきがそのまま放置されています。思うようにボランティアが手伝えない、何か変なことになっています。東京新聞“本音のコラム”北丸雄二さんの論評です。

桜の下の満開の無能 4月19日付

北丸雄二 — ジャーナリスト —

能登は至るところで桜が満開で、その青空の下、発災後3ヵ月半というのにひしゃげ潰れたままの家屋が続くシュールな対比が目眩するほどでした▼ポリタスTVの津田大介さん、青木理さんと2泊3日で金沢から穴水、珠洲、輪島と回りました。自身も被災した若者らが避難を断り自力で現地復旧活動をしていました。けれど圧倒的にボランティアが少ない。「発災直後のボランティア

は逆に迷惑」などと中央の政治家が訳知り顔で発信し続けたことが影響し、いま来てくれる人でも「こっそり」。善意や意識の高さを隠さなければバッシングされるこの日本の空気…。官民の連携不足も露わです。「首長も議会議員も姿が見えない」「僕たちの作った活動拠点を行政が利用しない」。珠洲の水道復旧はまだたった 8%です。現地自治体の疲弊は仕方ないとしても、では県庁は、政府は？大局的な復興プランが未提示のまま財務省が人口減少地の復旧コストを口にしました。金をかけても無駄。つまりこの政府は早晚、大都市以外は見捨てるという論理。大阪万博を見れば腑に落ちます▼今、台湾地震の傾斜ビルがたった 15 日で解体終了のニュース。一方で輪島朝市の焼け野原には財産権など無きが等しき瓦礫や錆びた鉄骨、車の残骸が 105 日間ほぼ手付かずに山積みです。この彼我の差、腹立たしさ。まずは片付けろ。

そういえば大阪万博も各国が自前で建てる“タイプ A—通称“万博の華”だって—”のパビリオンが当初 60 カ国だったのが、3 割減の 40 カ国程度になると吉村府知事が語り、それでもなんも問題ありましえ〜ん的なことを言っていました。こんだけ減ってて、しかもそのうちの 10 数カ国は工業者が決まっていらないんだとか？どうするおつもりなんでしょかねえ〜。要は会場内はガラガラで空地は芝生や花壇でごまかすんだそうですよ！前売りチケットもまだ 8%程度だとか、もうやる意味ないじゃんと思いますけどねえ〜。東京新聞“熱風涼風”松原耕二さんがこんな風に書いていました。

祝賀資本主義の本質

松原耕二 — ジャーナリスト —

大阪・関西万博開催まで 1 年を切った。小学生のころ行った 1970 年の大阪万博で、見知らぬ国々のパビリオンをワクワクして回ったのを覚えている。あれから半世紀、世界がこんなにも身近になった今、一カ所に集まって開催する意味がどれだけあるのだろうかという思いが拭えない。

戦後、日本は国際博覧会を 5 回、五輪を 4 回開催、落選を含めた招致活動期間も考えると、日本ほど五輪、万博好きな国はないのではと思ってしまう。

こうした姿勢を「祝賀資本主義」と名付けた米国の専門家、ジュール・ボイコフ氏は、メガイベントが「通常の政治のルールが適用されない例外状態」を生み出すと言う。国際イベントなら費用が何倍に膨らんでも結局は容認されてしまう。インフラ整備などに巨額の税金を投入しながら、大抵は民主的プロセスを欠き、利益を得るのは一部の人たちだと指摘する。

思い起こせば 95 年に中止になった都市博も、2016 年の五輪に東京が立候補した時の計画でも、臨海副都心の開発がもくろまれていた。

今回の大阪・関西万博も湾岸埋め立て地「夢州」に、国のお金も引っ張ってきて地盤や交通網などのインフラを整備し、後に同じ夢州の中に造られるカジノを含む総合型リゾート(IR)につなげることができる。そんな税金の使い方に同意したつもりはないという人も少なくないだろう。それでも祭りは止まらない。そう、それこそが祝賀資本主義なのだ。

“総合型リゾート”、かあ〜。日本にはパチンコとパチスロでギャンブル依存症の人たちが 320 万人もいるとのこと。さらにカジノで水原一平さんみたいな人間をもっと増やすぞお〜ってことでしょ。国がかりの犯罪のように思えます。何かカネのかけるところが狂ってるように僕には見えますが…。財政破綻寸前の大阪府の目的は、万博ではなくゴミの埋め立て地で一攫千金を狙っているように思えますが、いずれこれも破綻するんですよね。

11日の昼前、白昼堂々日本橋高島屋の催事場から販売価格約 1040 万円の 24 金製の抹茶茶碗が盗まれたとの報道。その数時間後には、犯人が隣の江東区内の古物店に持ち込み 180 万円で売り、間を置かずそこから北上した台東区内の買取店に 480 万円で転売されていたそうです。容疑者の逮捕と盗難品の発見—幸いにも、まだ“原形”をとどめたままでした—で、一件落着となりました。一步間違えれば、わが国の貴重な芸術品は遠く海を渡っていたかもしれませぬ。日本橋高島屋では前日から“大黄金展”が開催されていて、金の工芸品 1000 点以上が展示・販売されていたそうです。盗まれたのは、金作家・石川光一氏の作品で、窃盗事件はまさにドラマさながらの“プロ”の犯行とみられていましたが、事件から 2 日後に逮捕されたのは、無職の 32 歳の男、当の本人は、“盗んだ茶碗でお茶を飲もうと思ったが、現金に換えた方がいいと思った”と釈明したとか。デパート側の警備もなんかマヌケに見えます。最近、僕のところにも金相場がどんどん高騰しているので、財テクで買わないかというような営業マンからの電話があります。まったく興味ないので相手にしてませんが、金の正しい価格ってどこにあるんでしょうか。持ってる分にはそれなりの価値があるけど、いざ処分となると、足元を見られて安く叩かれて終わりのようにも見えます。

ガザ地区をめぐり、パレスチナとイスラエルがドンパチをしていると思ったら、今度はイランとイスラエルがやりはじめました。これエスカレートしたら互いに核保有国なので大変なことになりそうです。欧米もどっちに加担したらいいのか、フラフラしています。アジアの片隅の島国で暮らしていると、中東の歴史や現在に疎いのですが、その辺りを東京新聞“本音のコラム”師岡カーマさんが舌鋒鋭く読み解いていました。

愚の応酬 4月20日付

師岡カーマ — 文筆家 —

在シリアのイラン大使館がイスラエルによるとみられる攻撃を受け、イラン革命防衛隊高官などが死亡(民間人の死者も出た。自分たちの住む街で普段通りの日常を送っていた人たちだ)。イランはこの挑発に乗ることなく、「イランのイスラエル攻撃が近い」と繰り返すアメリカに肩透かしを喰らわせれば格好が付いたのに、報復を息巻く傘下の民兵集団らの内圧に耐えられなかったらしく、大規模なミサイル・ドローン攻撃を仕掛け、ほとんどが撃ち落とされた。ほぼ実害のない攻撃は意図的だったのだろうが、イスラエルに被害がなくてもパレスチナが間接的に被った害は甚大だ。

案の定、ガザでの殺戮により国際的圧力にさらされていたイスラエルは「敵に囲まれた永遠の被害者」役に返り咲き、それを容認する偽善が露呈して形勢が悪くなっていた「主要先進国」たちも再び道徳的優越感に浸れる新展開に喜々として、ガザでのジェノサイド関連ではついぞ聞かれなかった「制裁」という言葉を早くもイランに対して振りかざす。今もガザでは1日に100単位の市民が死傷しているのに、加害者は悠々と被害者ヅラできる。この畏にはまるも地獄、はまらぬも地獄の状況を自ら作ったのはイランだ。そして今度はイスラエルがイランを攻撃との報道。愚の応酬が罪なき民の命を弄ぶ。

ナタニエフというリーダーはこの紛争にどう決着をつけたいのでしょうか。パレスチナ人を皆殺しにしてガザの土地すべてを手に入れたい、まさかそこまでは考えていないと信じたいのですが…。

前回に続き、小池都知事問題の続編を今朝の東京新聞“本音のコラム”で前川喜平さんが深掘りしていました。

政治家小池百合子の命運② 4月21日付

前川 喜平 — 現代教育行政研究会代表 —

先週の本欄で僕は、小池都知事の学歴詐称とその隠蔽工作の疑惑について、メディアがカイロへ行って真相を確かめるべきだと書いたが、問題はそう簡単ではなく、もっと複雑かつ重大だと分かってきた。

日本のメディアがカイロ大学に取材しても、おそらく「小池は卒業した。声明は大学が出した」と答えるだろう。この問題を追及してきた作家・黒木亮氏によれば、同大学と小池氏は「同じ穴のムジナ」であり、彼女の卒業証書は「プレゼントの証書」なのだという。エジプト通のジャーナリスト・浅川芳裕氏によれば、彼女が「エジプトのパパ」と呼ぶ軍閥政治家・ハーテム氏の権力による「超法規的な卒業証書」だという。

小島敏郎氏は記者会見で、問題は通学や試験の実態、成績証明書、同級生などを含む「卒業実態」の有無だと強調した。僕の言葉で言えば小池氏は「裏口卒業」なのだ。それは北原百代氏が証言する小池氏の「学業」の実態や、アラビア語に通じた黒木氏が小池氏のアラビア語を「大学教育を受け、試験を突破できたとは到底思えない」と評していることから十分推察される。

重大なのは、小池氏がエジプト政府とカイロ大学に「生殺与奪を握られている」(浅川氏)ことだ。それは「大きく国益を損ねる状態」(小島氏)なのである。

“生殺与奪”…生かすも殺すも、与えることも奪うことも、思いのままであること。絶対的な支配力や権力を持っていること。彼女がカイロ大に入学したのは、1972年、第4次中東戦争によるオイルショックの時代です。当時の首相田中角栄は原油の調達をエジプトに頼っていて、その仲介をしたのが、父小池勇二郎だったとか、キナ臭い話。